

幕末から今日まで受け継ぐ学びの風土

金田・神崎の教育発祥

8月末から新校舎での学校生活を迎える児童・生徒たち。百年以上の歴史を誇る学校の歩みに大きな節目が刻まれます。ここで、金田・神崎地区の学校教育発祥の物語に迫ります。

長州に大敗喫した小倉藩藩の命運を「教育」に託す

動乱の幕末に、長州藩と幕府とが次代を掛けて戦った「第二次長州戦争」。幕府軍として参戦した小倉藩(福智町も領内)は、「小倉口の戦い」で軍備と機動力に勝る長州藩の猛攻を受けて大敗します。小倉から平尾台、そして最終的に福智町の隣・香春へと敗走した小倉藩は、慶応3年(1867)3月に「香春藩」を発足。藩の再建を教育にかけ、5月には藩校である「思永館」を香春へと移します。それから3

年後、藩庁と藩校を香春から豊津(現みやこ町)に移し、藩校を「育徳館」と改称。この間に20もの支館が開校され、現在の福智町内には、弁城村支館(弁城)と神崎村支館(神崎)がこのとき設置されました。神崎村支館では、九州屈指の私塾「水哉園」で学んだ漢学者・佐藤猶龍が「120人ほどの門弟を熱心に指導した」と伝えられています。



→佐藤猶龍の功績を称え建立した碑(神崎)。

金田・神崎の教育発祥の地 碧巖寺の私塾「昭倫舎」

小倉藩の命運をかけた「教育」の機運は高まりをみせ、藩内各地で私塾や寺子屋が盛んになります。なかでも有名私塾の「咸宜園」や「恒遠塾」で学んだ碧巖寺(金田)17代住職黒田天麟は本堂



→教育の礎を築いた碧巖寺・黒田天麟和尚の図を「昭倫舎」という塾舎にし、下田川地域の教育振興に尽力します。明治5年(1872)8月に「学制」が公布されると、翌年3月、

Close up! Japan History

幕末・明治を大きく動かした長州藩の「教育の力」 ↓ 多くの偉人を輩出した松下村塾。

中国地方の150万石の大大名だった毛利家は、天下分け目の「関ヶ原の戦い」で石田三成方に味方し、家康の反感を買って長州藩36万石の外様大名に転落します。財政が逼迫した長州藩は、3万人いた家来を1万人以下に削減せざるを得ませんでした。解雇された家来たちの多くは農民などに転身しましたが、国を支える人材育成として子々孫々に一定以上の教育を受けさせ続けます。幕末の長州藩には他藩よりも私塾や寺子屋が多くあり、106の私塾、1304の寺子屋が存在。その中の1つである吉田松陰の私塾「松下村塾」では奇兵隊の創設者・高杉晋作や初代首相・伊藤博文が学ぶなど、幕末から明治にかけて、日本の礎を築く重要人物たちが、教育を重んじた長州藩から数多く輩出されました。



上野小学校、市津支校、弁城小学校、伊方小学校が開校。昭倫舎はそのまま「金田小学校」へと移行する形で、黒田天麟を初代校長として創設されました。藩の命運を託した幕末からの教

育の取り組みはこうして結実し、147年もの間、金田神崎地域の子どもたちを育んできた「金田小学校」の歴史が幕を開けたのです。

Key Person! Interview

「因幡の白兔」と呼ばれた黒田天麟



→金田小発祥の地・碧巖寺。

天麟和尚は本が好きで、いつもお寺の中で勉学に励んでいたため、日焼けせずに色白で、身内からは「因幡の白兔と呼ばれていた」と伝え聞いています。教育者としての意志はその後、天麟和尚の直系の子孫である黒田豊子と菱沼サトへ継承され、金田小を含む下田川地域の小・中学校で教鞭を振っていました。



→町の文化財に指定されている黒田天麟和尚の供養塔



聖応寺(小倉南区)・碧巖寺 黒田 教江 住職